

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

*** 東京天文台 100 周年記念誌資料ーその 3-32-7 (岡山天体物理観測所建設工事写真)**

筆者が引き継いだ東京天文台百年記念誌資料については、アーカイブ室新聞 346 号に「東京天文台 100 周年記念誌作成時の資料ーその 1ー」、349 号に「東京天文台 100 周年記念誌作成時の資料ーその 2ー」、353 号に「東京天文台 100 周年記念誌作成時の資料ーその 3ー」、という記事を書いた。これらの資料は段ボール箱 3 個に入っていたので 1 箱目をーその 1ー、2 箱目をーその 2ー、3 箱目をーその 3ーとし、その内容のリストを作成し報告した。これらの資料についてリストのみでなく、内容を具体的に紹介する記事を書き始めたが、順不同で筆者が興味深いもののかつてにピックアップして書いている。今回は 3 箱目の 32 項目の一部の 32 枚の写真について報告したい。第 353 号のリストには、

32. 横 A3 なめこ表紙でつづった岡山建設時のアルバム

の中の写真で、前号より時系列では遡るものもあり、全く順不同になる。中には日付があるものもある。写真 1 の脚注には「駐車場の 11 号」とあるが、意味不明である。写真に 2 の脚注には「D 地点」とある。これも意味不明である。写真 3 の脚注には「官舎の井戸、深さ 5m 位」とある。鴨方町にはまだ水道はなく、官舎の水は井戸水であった。



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6

写真 4 の脚注には「観測台」とあり、これはスリットの内側を上下するブリッジ部分で

ある。写真 5 の脚注には「メッキ室塗装」とあり、まだ蒸着装置が入る前である。写真 6 は建築中の官舎である。



写真 7



写真 8



写真 9

写真 7～9 の脚注には日付があり「35.3.4」とある。写真 8 は蒸着装置搬入の様子が写っている。写真 9 は鴨方町役場に借りていた車庫の写真で、正面が見える車庫の左に写っているのが天文台の車庫である。写真 10 が天文台車庫の入り口である。写真 11 はウォールクレーンを 2 階床の穴から見上げた写真である。写真 12 は 74" ドームの内装の様子であろう。



写真 10



写真 11



写真 12

写真 13 は、官舎の基礎のコンクリート打ちが行われた風景である。写真 14、15 は官舎が出来上がっていく過程の写真である。写真 15 の官舎の前に立っている人物は矢野十郎氏である。



写真 13



写真 14



写真 15

写真 16 ドーム内の部屋の天井が貼られていく過程の写真である。写真 17 には脚注があり「3月12日、外装下塗り作業」とある。写真 18 には脚注はないが、ドームにアルミが貼られていく工程を移したものである。

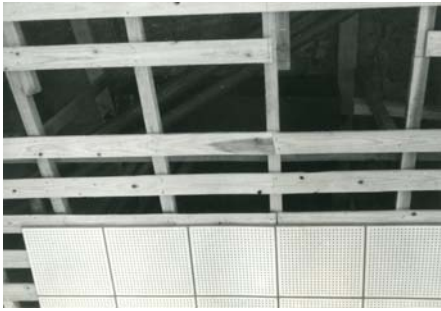


写真 16



写真 17



写真 18

写真 19 の脚注には「道路補修さる」とある。道路下に側溝を設ける工事であろう。写真 20 の脚注には「展示館付近工事現場」とある。写真 21 の脚注には「3 月 10 日、西玄関外廻り仕上げ中」とある。ドームの西玄関は観測者、職員の出入り口であり、東玄関はヴィジターギャラリーへの出入り口であった。



写真 19



写真 20



写真 21

写真 22 の脚注には「日曜ピクニック風景、36”ヨコ」とある。赤い矢印のところに人がいるらしい。写真 23 の脚注には「山火事、35 年 2 月 24 日午前 6 時」とある。山火事のあった日時の記録になっているが、どうしてこんなに時系列が順不同かと思う。写真 24 の脚注には「作業風景」と飲みある。何の作業か書いてほしい。



写真 22



写真 23



写真 24

写真 25 から 11 枚の写真には番号がついており、極軸据付けの様子が写っており、5 月 8 日の日付がある。この極軸搬入の写真を番号順に掲載するのはいかにも不自然であるので、工程の時系列に直して掲載し括弧の中に元の番号を書いておく。写真 34 (番号 1) の写真には脚注があり「番号 1、5 月 8 日、ドーム頂上より撮影、時間朝 8 時～10 時」とある。

写真 25～28 は、極軸をスリットからデリッククレーンで吊り込まれる様子が写っている。



写真 25 (No. 5)



写真 26 (No. 6)



写真 27 (No. 7)

写真 29～34 はドーム内に設置された望遠鏡とりこみ用「ニマタ」と呼んだクレーンで据付けている様子が写っている。この「ニマタ」クレーンはアーカイブ新聞 832 号の写真 3 である。水平に吊り込んだ極軸を緯度に合わせた斜め吊りにするためにデリッククレーンと 2 つのクレーンを使い匠の技でくみ上げて行ったものと思う。



写真 28 (No. 8)

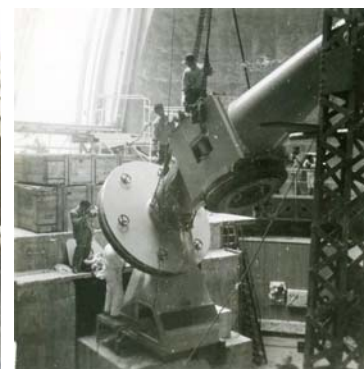


写真 29 (No. 9)

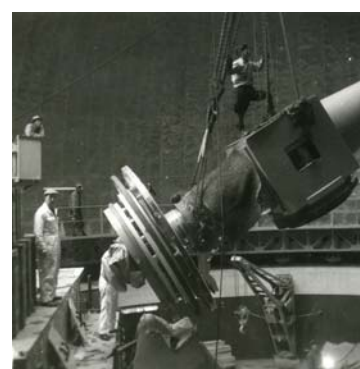


写真 30 (No. 10)



写真 31 (No. 11)



写真 32 (No. 2)



写真 33 (No. 3)

最後の写真 4 枚は、スリットの側面に設けられた梯子の最上段から撮影したものと思われる。天文月報の石田五郎氏の記事によれば、この極軸据付けのための方位測定は 4 月上旬、工事の合間にやっと強行できたとある。方位測定は晴天の夜、北極星を使って行うのである。ドーム内の足場が取れ、ドームが回せるようにならなければならない作業である。



写真 34 (No. 4)

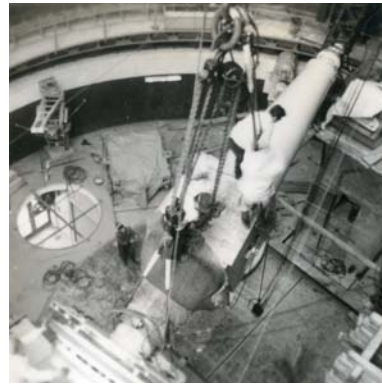


写真 35 (No. 1)

以下、石田五郎氏の記事を引用しよう。

「望遠鏡の極軸据付のための方位測定は 4 月上旬、工事の合間にやっと強行で来た。それは外装を終わり、すっかりおおわれたドームが、内装の足場が取れないためにいつまでも回転ができない。測定は南おいあの上にセオドライトをおき、北ピア上に竹の物差しをおき、北極星の子午線通過を観測した。物差しの目盛を星と同一視野でよみとるので、セオドライトの目盛を全然必要としない一種の Null-method である。はじめてドームがまわった夜に、すぐさまこの測定を行い、これにつづく三晩ほど晴れがつづいたのは全くの僥倖である。我々の仕事には頓着なく望遠鏡のとり込み用フレームがかつぎこまれ、北ピアは再びふさがれてしまう。それからの観測値に基づく墨入れも本物の職人と少しはやりあいながら強行した。」

この中の望遠鏡のとりこみ用フレームというのが「ニマタ」と呼ばれたものであろう。また「僥倖」という難しい言葉が感慨深い。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp